

南九州古墳時代人頭蓋に認められた第三後頭顆

The Third Occipital Condyle on a Protohistoric Kofun Skull of Southern Kyushu

竹中正巳*・具志堅亮**

Masami Takenaka, Ryo Gushiken

*鹿児島女子短期大学

**鹿児島県天城町教育委員会

抄録：宮崎県えびの市島内地下式横穴群163号墓1号人骨（性別不明・若年）の頭蓋に第三後頭顆が認められた。本例は第二頸椎の歯突起が16mmと上下に長く、それが第三後頭顆が生じた一つの理由であると考えられた。

Key words：第三後頭顆、大後頭孔、軸椎、歯突起、南九州古墳時代人

1. はじめに

頭蓋と脊椎との関節は、頭蓋側では後頭骨の左右の後頭顆が関節を構成する。しかし左右の後頭顆に加え、ごく稀に大後頭孔の前縁中央に頸椎との関節面を生じることがある。この新たな関節面は第三後頭顆 (third occipital condyle) と呼ばれており、Meckel (1815) によって初めて報告された。

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群163号墓1号人骨の頭蓋に第三後頭顆が認められたので、今回報告する。

2. 資料および方法

宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群163号墓1号人骨は性別不明の若年 (13~15歳) で古墳時代の人骨 (図1) である。本人骨の歯式を下に示す。

*☆☆ ○：歯槽解放
7 6 5 4 3 2 1 | ○2○4 3 5 6 7 *：乳犬歯残存
7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 ☆：萌出位置異常

歯式のとおり、本人骨には、上顎左乳犬歯が残存しており、上顎左側の犬歯と第一小白歯の萌出位置が逆転している (図2)。研究の方法は肉眼観察によって行った。

3. 観察結果および考察

後頭骨の大後頭孔の前縁中央に関節面が認められ、第二頸椎の歯突起の上端が関節している (図3・4)。これは第三後頭顆 (third occipital condyle) と呼ばれる形態変異である。歯突起の上面に通常では認められない関節面が生じている。

通常、歯突起の先端と大後頭孔前縁との距離は12mm以

下といわれ (鈴木・森崎, 2013)、隙間がある。本人骨の歯突起は上下方向に16mmと長く、その隙間がない。これが第三後頭顆が生じた一つの理由であると考えられる。

第三後頭顆は日本列島では北海道のアイヌに多いことが知られており、小金井 (1890) によれば北海道アイヌ男女頭蓋163例中9例に観察されたという。しかし、百々ら (1991) によれば、古墳時代から現代までのアイヌを含まない日本人男女では、694例中わずか1例 (0.14%) しか見出ししていない。

南九州の古墳時代人の形質には地域差、集団差があることが知られている (松下, 1990; 竹中, 2012)。今後、南九州古墳時代人の系統を考える上で、南九州の中の地域ごとに第三後頭顆の出現頻度を調べ日本列島内の各時代および各地域集団との出現頻度と比較する研究が必要であると思われる。

4. 引用文献

- 1) 百々幸雄・木田雅彦・石田肇・松村博文 (1991) 北海道厚岸町下田ノ沢遺跡出土の擦文時代人骨、人類学雑誌、99巻4号、pp.463-475
- 2) 鈴木武志、森崎浩 (2013) 脊髄保護が重要な術式への対応
① 頸椎・頸髄手術、Anesthesia 21 Century、15巻3-47、pp.4-11
- 3) 松下孝幸 (1990) 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究、長崎医学会雑誌、第65巻、pp.781-804
- 4) Meckel JF (1815) Über einige Abnormitäten der Knochen. Deutsches Archiv für die Physiologie 1: 641-644
- 5) 竹中正巳 (2012) 古墳時代—中央と辺境、季刊考古学、第118巻、pp.70-73

(平成29年1月18日 受理)

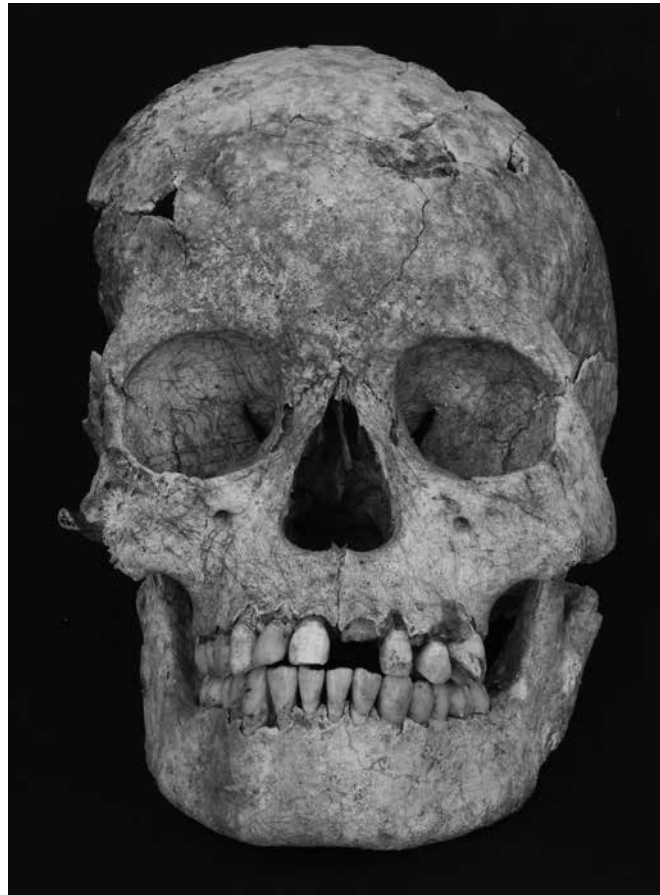


図1 島内163号墓1号人骨（性別不明・若年）頭蓋正面観



図2 島内163号墓1号人骨（性別不明・若年）上顎歯

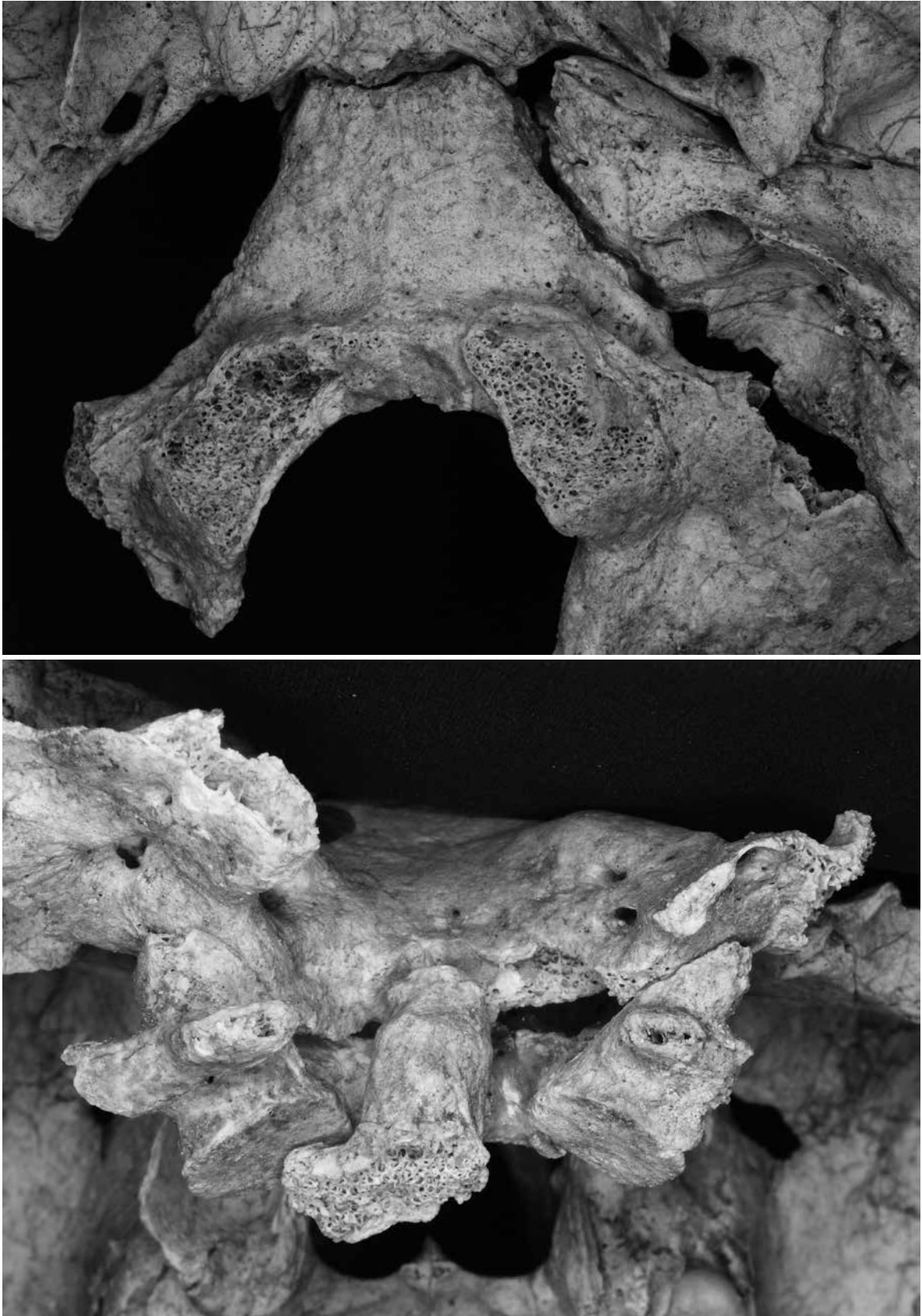


図3 島内163号墓1号人骨（性別不明・若年）第三後頭顆
（上：頭蓋底 下：後頭骨、第一・第二頸椎）

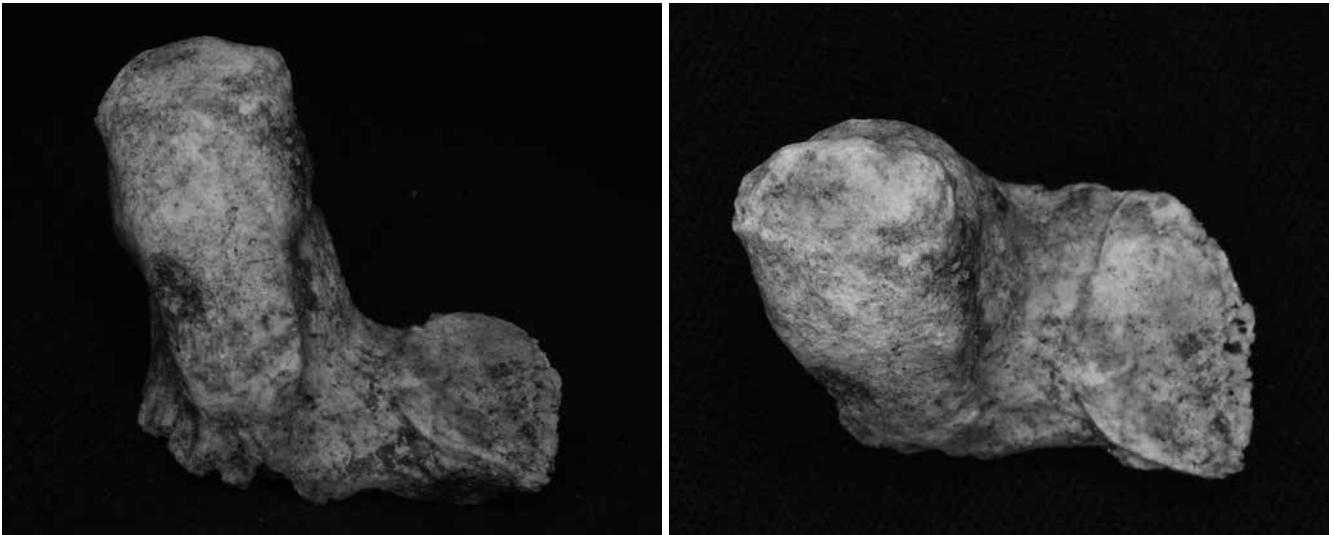


図4 島内163号墓1号人骨（性別不明・若年）第二頸椎齒突起
（左：齒突起前面 右：齒突起上面に生じた関節面）